

「長崎の原爆から思う」

高校二年 S・F

「体験しなければわからぬほど、お前は馬鹿か」絵画を通して原爆の禁止を告発した故丸木俊さんの言葉であるが、今では胸に突き刺さるような言葉だ。なぜなら、今夏、私は長崎の二泊三日の派遣団の活動で、八月九日、長崎の平和記念式典に参加した貴重な体験をはじめとして、爆心地付近のフィールドワーク、被爆者の講演や、原爆の惨状を学ぶ機会を得た。それらの平和学習を通して、戦争を体験しないでも十分に核兵器の悲惨さと恐ろしさを知ったからだ。その事前学習や自主学習を通して学んだことは、いままでで一番深く平和について考えさせられた。

実際に、原爆遺構に指定されている、山王神社二の鳥居、旧長崎医科大学門柱、浦上天主堂旧鐘楼、旧城山国民学校校舎を訪れて、それらの、爆風によるリアル過ぎるほどの傾きや、原爆にまつわるエピソードなどに心が震えた。五十トンもあった浦上天主堂の旧鐘楼は、被爆後しばらく保ったものの、夜中にころげ落ち、その地響きで、生き残った人々は、またアメリカ軍の攻撃が来たかと、恐れたという。また、爆心地から五百mにある城山国民学校は、九州初のコンクリート3階建ての白壁の校舎で、白亜の学校として、多くの子供たちの憧れだった。しかし、瞬時に1400余名の児童、二八名の教職員、一〇五名の学徒隊員をなくした歴史を持つ。

長崎原爆資料館に行ったとき、驚いたのは英国で一九五〇年以降、核兵器反対運動が行われていたことだ。日本は、唯一の被爆国で、核兵器の悲惨さを知っている国として被爆者を中心とした反戦、反核運動は行われている。英国は、一九五〇年代に英国領の豪州の一部で、繰り返し核実験を行った。それに対し、英国国民から、反核運動がおこったとは、恥ずかしながら、反核運動は日本のみで行われていると思っていたので、驚きだった。そして、まるで世界に同志を見つけた、そんな気分だった。

原爆は、人々の生活や、笑い声、セミの声、生あるものを消し去った。原爆資料館で見た、ロザリオや、弁当箱、ガラス瓶などが、溶けているのは、原爆の恐ろしさを刻み付けた。ケロイドの跡や、ガラス片で破れ、血が付いた服なども、人へ与えた被害を物語っていた。実際、原爆は一瞬にして大勢の人々の家族を奪い去り、生き残って人々に深い爪痕を残した。被爆者のかたは、自分の母親が死体で転がっているとき涙も出なかった、という。人は、想像をはるかに超えるショック状態になったとき、感情を虚無にする。長崎の原爆で生き残った人々は、きつとその状態だったのだ。親や兄弟を、原爆で亡くした子供も多かった。私たちと同世代の子も亡くなった。平和でないとき、それは家族も自分を応援してくれる人も死んでしまふとき、と想像したら、絶対に繰り返したくないと思った。また、先の原爆で長崎の市民だけでなく、朝鮮や中国、海外から徴兵された人も少なからず亡くなった、という事実を忘れてはならない。自分たち日本人のことがばかり考えていると、ついそうでない側面は忘れ去られているように思う。数年前に、太平洋戦争の時に私の地元のに駆けり出されて来た朝鮮人たちも終戦間際に、人に対して、あり得ない状況で働かされていた事実を知ったが、今のことを聞くまで忘れてしまっていた。自己中心的な考えにならないことも平和の道への一歩ではなかったか、と改めて自分に問いかけた。

少し話が変わるが、私は、医師を目指していて、被爆直後から医療行為をしていた永井隆博士が印象に残っている。長崎の復興を願ひ、医学の進歩や世界平和に貢献されたことから長崎市名誉市民第一号となっている。

また、世界に核戦争防止国際医師会議(IPPNW)があることを知った。非人道性を医療の点から裏付け、核兵器反対運動の議論を主導した。貴団体は、ノーベル平和賞を受賞しており、会員数は数十万人いるといわれるが、日本支部の会員数は三千人程にとどまる。日本は、唯一の被爆国でありながら、会員からの発信が十分に広がら

ないまま、会員の高齢化が進む。世界から、活動が弱いことを嘆かれるという。私も、原爆についてその悲惨さを痛感した身として、永井博士のように、日本から世界の平和運動に貢献しつつ、他人のためにささげられる医師になりたい。

今年、核兵器を禁止する史上初の条約が採択された。今回は、節目の年の原爆記念式典だった。総理に核兵器禁止条約に関する言及が期待されていた。しかし、日本は核の傘下の立場から不参加となり、世界中から落胆の声が上がった。

条約の主要推進国のオーストラリア・ハイノッチ在ジュネーブ代表部大使は、条約は「核の傘」でも参加できるものとなるよう、具体的行為でなければ、禁止されないものとした、と断言していた。「『核の傘』という『脅し』を根幹とする)安全保障体制に加わっていること自体は『具体的行為』とは言えない」(朝日新聞 二〇一七年八月九日付朝刊、一四(七)そうだ。つまり、日本が参加しても問題はなく、迎合されていたのだ。それなのに、核兵器禁止条約に参加しなかった日本政府の姿勢に、長崎市長や、被爆者代表は強い口調で訴えた。総理は、式典の挨拶では、顔色を変えず、条約に触れなかった。アドリブの一言も入れられなかったのだろうか。確かに、核の傘下にいる日本が大胆な行動をすると、何が起こるかわからないが、何も行動しないでは、始まらないではないかと思う。間近に見えていて、歴史上の節目の機会をまた一つ逃してしまったと感じた。

長崎市長に、あなたたちは、種をまきに来ている、知識を吸収して、それをどう生かすか、行動して花を咲かせてほしいと激励された。

私たちは、戦争を知らない若い世代として、批判されることがあ

るが、私なりに長崎派遣団活動参加という貴重な機会を得て、さらに新聞や本なども加えて読み、知識を深めた。今、私にできることは、この長崎の原爆の惨禍を回りの人々に伝え、忘れないことだ。そして、大人になったら、医療者の視点から、平和を願う活動する、そんな医師になる。あらたな決意を生み出してくれた今夏の経験に感謝する。

世界では、毎日のように紛争が続いている。七二年戦争をしなかった日本も、平和とは言い難い状況である。冒頭に戻るが、私は、今となっては、体験しなくとも戦争も原爆もやるべきでない、と断言できる。